13～14世紀
の
琉球と福建
・

13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究
―中国福建省を中心に―

栗　建安・謝　必震
伊藤　正彦・大田　由紀夫
小畑　弘己・金武　正紀
新里　亮人・田中　克子
宮城　弘樹・森本　朝子

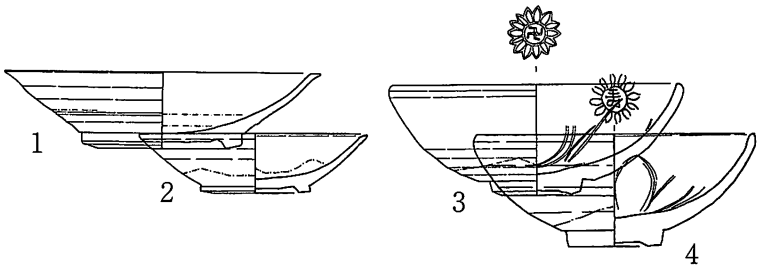
木下尚子（編集）

平成17～20年度
科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書
研究課題番号　17251007

March 2009

熊本大学文学部

表紙説明



1．今帰仁タイプⅠ類磁器（沖縄県　今帰仁グスク　主郭Ⅶ層）

2．今帰仁タイプ磁器（福建省　連江浦口窯採集）

3．ビロースクタイプⅡ類磁器（沖縄県　今帰仁グスク　主郭Ⅱ層下部）

4，ビロースクタイプ磁器（福建省　閩清青窯採集）

例言

- 本報告書は、「13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究―中国福建省を中心に―」基盤研究（A）海外　17251007（2005年４月～2009年３月）にかかわる共同研究の報告書である。
- 本共同研究においてあらたに撮影・実測をおこなった資料については、メンバーの共有資料とする。
- 本書にかかわる写真・図版は熊本大学文学部考古学研究室で保管する。
- 本書で引用等をおこなった個人名称については、標記上の敬称を略した。
- 本書の編集は木下による。

序

本研究の発想の原点は、琉球列島のように文化基盤の小さな島嶼群がなぜ独立国－琉球国を形成しえたのかにある。わたしは交易と農耕がその鍵になると考え、大和（九州以北の日本列島）と南島（琉球列島）の関係を中心に考古学的な研究を継続し、2001年に以下の見通しを得た。すなわち９～12世紀に大和で需要が高まったヤコウガイを介した交易と、10世紀以降の穀物栽培の南島への定着を基盤に在地社会の階級化が進み、13世紀にはこの延長上に王国形成の歩みが始まる。しかしその後進展した南島の考古学研究（グスク研究・陶磁器研究）によって、12世紀以前と13世紀以後の南島の歴史の展開になおヒアタスのあることを認識し、13世紀の変化についてさらなる検討が必要であることを痛感した。

南島の先史時代（12世紀以前）において、外来の文化的刺激は常に北から南に及ぶという方向性をもつ。その最後の波は11～12世紀で、九州からの文化的影響は琉球列島を南北に貫いて八重山に達した。この趨勢の衰えた13世紀、沖縄諸島に本格的なグスクが登場し、『球陽』（18世紀に編纂された琉球国の正史）は中山国王（英祖王：在位1260～99）が浦添に王陵をつくったことを伝えている。またこの時期以降南島では食器に占める中国陶磁の割合が増加していく。しかし、グスクにも中国陶磁にも北から南に向かう量的傾斜は認められない。これは、この変化が従来とは異なる方向性をもつことを示唆する。グスクの成立から15世紀の琉球国成立に至る一連の歴史を視野にいれると、南島の歴史は13世紀においてその舵を大きく切りはじめたと考えられるのである。

本研究は、こうした南島の歴史的転換がどのようにおこったのかを解明しようとする一つの試みである。糸口にしたのは南島にもたらされた中国陶磁器である。11世紀末～12世紀初頭以降、おそらく博多に輸入された貿易陶磁が南島にもひろく搬入されるようになり、以後、中国陶磁器が南島全域に普及していく。この中に、博多には少ないが南島に特徴的にみられる２種類の磁器がある。今帰仁タイプおよびビロースクタイプと呼ばれる２種類の粗製の磁器（白磁あるいは青白磁）がそれで、1988～1991年、金武正紀氏によって提唱されたものである。博多を根拠に貿易陶磁を研究する田中克子氏はその分布の特殊性に注目し、2004年にはこれらが13～15世紀に福建北部の窯で焼かれたものであろうこと、さらに琉球国による進貢貿易以前に中国との直接取引きのあった可能性を指摘した。こうして博多や南島に搬入されたおびただしい数の中国陶磁器の中から、独自の動きを示すマーカーが抽出されたのである。わたしはこれこそが13世紀における南島の変化のヒントになる文物だと考え、これをピンポイントで追究するために共同研究を企画した。

共同研究には先行研究を進めておられた上記２氏のほかに、華南の陶磁器研究のリーダーである栗建安氏に加わっていただいた。また今帰仁グスクの調査・研究を進める宮城弘樹氏、南島の食器研究を進める新里亮人氏に参加願った。わたしたちは消費地の状況と生産地の状況をできるだけ具体的に検討し、消費地ではその時期を、生産地では窯を特定することを課題とした。このほか、東南アジア貿易陶に詳しい森本朝子氏と博多・琉球の銭貨研究を進めておられる小畑弘己氏に関連分野からの助言を、宋・元・明時代の中国史を専門されている伊藤正彦氏と大田由紀夫氏、中琉関係史研究で著名な謝必震氏に文献史学からの伴走をお願いした。それぞれのメンバーが一騎当千さながらに問題解決にむかって力を発揮されたことは、本書の報告でご理解いただけよう。掲げたテーマには、たしかな風穴があいたと思う。

４年間の調査にあたり、福建博物院・同文物考古研究所・福建師範大学・同図書館・連江県博物館・闽清県博物館・闽清県義窯村（以上中国）、石垣市教育委員会・石垣市史編纂室・石垣市立八重山博物館・浦添市教育委員会・沖縄県教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター・壺屋焼物博物館・東京大学東洋文化研究所・今帰仁村教育委員会・那覇市教育委員会・福岡市埋蔵文化財センター・福岡市教育委員会・松浦市教育委員会・松浦市立鷹島埋蔵文化財センター・松浦市立鷹島歴史民俗資料館ならびに関係各位のご配慮とご助力をえた。また胎土分析について田上勇一郎氏に玉稿をいただいた。2006 年 9 月の調査では具志堅亮氏（喜界町教育委員会）の協力を得た。要旨の英訳には林田憲三氏、中国語訳には劉軍氏、ハングル訳には朴美子氏のお力を借りた。編集にあたり熊本大学文学部考古学研究室の山野ケン陽次郎君と堤絵莉子さんの助力を得た。上記の機関・各位に深く感謝している。

木下尚子

目　次

序

本文篇

第１章　研究の目的と概要　木下　尚子 …… 1

１．問題の所在と研究の目的

２．研究の組織・方法・経費

３．研究の経過

付１　陶磁関係用語の説明

付２　福建省の概要

第２章　白磁・青磁・青白磁の分類概念

１．关于中国的白瓷、青瓷、青白瓷的分类概念　栗　建安 …… 13

２．日本の白磁・青磁・青白磁の分類概念

—貿易陶磁分類の歴史を顧みる—　森本　朝子 …… 15

第３章　報告Ⅰ

第１節　今帰仁タイプとビロースクタイプ

—設定の経緯・定義・分類—　金武　正紀 …… 21

第２節　今帰仁タイプとビロースクタイプに関わる磁器生産地とその製品

１．福建闽江流域宋元时期窑址概况　栗　建安 …… 27

２．今帰仁タイプに関わる窯跡とその製品

—福建省連江県浦口窯跡の踏査と関連資料の調査—　宮城　弘樹 …… 38

３．ビロースクタイプに関わる窯跡とその製品

—福建省閩江流域窯跡の踏査と関連資料の調査—　田中　克子 …… 51

第３節　今帰仁タイプとビロースクタイプの消費地と消費状況

１．琉球列島における出土状況　宮城　弘樹・新里　亮人 …… 73

２．博多遺跡群における出土状況　田中　克子 …… 93

３．長崎県鷹島海底遺跡における出土状況　田中　克子 …… 102

４．相关的中国沉船遗址及其遗物　栗　建安 …… 105

第４節　今帰仁タイプ・ビロースクタイプ関連白磁の胎土分析

—中国窯跡・今帰仁城跡・博多遺跡群出土白磁の比較検討—

田上勇一郎 …… 111

第５節　今帰仁タイプとビロースクタイプの編年・貿易港・生産と流通
１．年代的位置付けと貿易港　金武　正紀　…… 125
２．生産と流通　田中　克子　…… 137

第４章　報告Ⅱ
第１節　九州・琉球列島における14世紀前後の中国陶磁と福建産白磁
新里　亮人　…… 145

第２節　東南アジアにおける14世紀前後の福建産陶磁
―インドネシア・マレーシア・フィリピンの遺跡の出土遺物―
森本　朝子　…… 155

第３節　略论古代福州港与中琉航海交通　谢　必震　…… 189

第４節　ふたつの「琉球」
―13・14世紀の東アジアにおける「琉球」認識―　大田由紀夫　…… 201

第５節　明初里甲制体制の歴史的特質
―宋元史研究の視角から―　伊藤　正彦　…… 219

第５章　総　括　木下　尚子　…… 249

資料篇
１．宋元期「琉球」関係主要史料一覧（稿）　伊藤正彦・大田由紀夫　…… 259
２．九州・琉球列島出土の中国陶磁一覧　新里　亮人　…… 269

要約　木下　尚子　…… 271
Abstract　林田憲三（訳）　…… 273
概要　劉　軍（訳）　…… 275
요약　朴　美子（訳）　…… 277

＊＊＊

付録：九州・琉球列島出土の中国陶磁一覧 CD-ROM　新里　亮人